



Title	『松浦宮物語』の物語構造：主人公と女君たちとの 相対的位相
Author(s)	井, 真弓
Citation	詞林. 2011, 49, p. 21-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67626
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『松浦宮物語』の物語構造

——主人公と女君たちとの相対的位相——

井 真弓

はじめに

『松浦宮物語』は、古典文学研究において他の中世王朝物語とは一線を画した扱われ方をしている。成立した年代が院政期末期という中古・中世の狭間にあることや、扱われている内容が中世王朝物語に多く見られる「悲恋遁世」ではないということも一因ではあるが、決定的な理由は、判明している作者像に強い関心が寄せられているためであろう。『無名草子』には、用例(A)のように『松浦宮物語』に関する評が記されており、現在では藤原定家の作であることが汎く認められている。

(A) また、定家の少将の作りたる¹とてあまはべるめるは、ましてただ気色ばかりにて、むげにまことなきものどもにはべるなるべし。『松浦の宮』とかやこそ、ひとへに『万葉集』の風情にて、『うつほ』など見る心地して、おろかなる心も及ばぬ様にはべるめれ。

(九八頁)

同書の記載によれば藤原定家が多数の物語を創作したことが

窺えるが、現存しているものは本物語のみであることから、「藤原定家」を知るための材料として『松浦宮物語』は多くの研究者の興味を惹き付けてきた。

『松浦宮物語』については、他の中世王朝物語よりも格段に多くの研究論文や著書が著され、考察が行われてきた。その嚆矢たる萩谷朴氏をはじめとする多くの研究では、本物語は和歌の修練などを目的として描かれた実験小説であり、物語作品としては見るべき点が少ない、あるいは失敗作との評価が一般的であった。このように、『松浦宮物語』が物語作品として評価されないことの要因としては、文体の変容や構想の不統一²、物語としての統一性や完結性の不存在³などが俎上に挙げられている。一方で三角洋一氏は本物語を「主人公弁少将には恋の物思いがつかないという、主題それ自体はむしろありふれたものであったが、かえってそこにこそ、『松浦宮物語』を創作した男性作家が多くの王朝の物語の愛読者であった、物語らしい物語を生みだそうとした意欲のほどをうかがうことができるのである」と、物語の主題・作者の構想・

意図が一貫したものであり、「すぐれて構築的な物語」と作品としての成立性を認めながらも、安易な状況設定や道具立ては物語作者としての定家の力量不足によるものとしている。豊島秀範氏に至っては、「私も、『松浦宮』の作品論を積極的に行うとする意志は、実は持っていない。…あくまでも定家との関連で『松浦宮』を考えてみようとするのが目的である」と、作品論よりも作者論の立場から分析が加えられるべきであると宣言しており、物語そのものとしての価値を全く認めていない。

作者が判明している以上はその情報に基づき作品を解釈することは当然のことであろう。しかしその一方で、作者の人物像を過剰に投影することによってかえって作品の本質を見失う恐れがあることを指摘したい。例えば本物語に登場する神奈備皇女、華陽公主、鄧皇后という三人の女君については、歌人定家の美意識を物語に実践して、旧・新、古・今、和・漢のような異極的な複合美を作り出そうとしているという解釈や、それぞれの女性が万葉調、古今調、新古今調という和歌の三様を象徴しているという解釈などは、作者が定家であるという認識なくしては想到し得ないものではなからうか。

定家という存在や、彼の本分たる和歌を通して本物語を解釈する方法論は多大なる成果をもたらしており、定家研究にも少なからぬ貢献をしたと考えられるが、その一方で当時の享受者による評価とはやや方向性が異なった解釈を採っている

危険性を孕んでいる。本稿ではそのような問題意識のもとで、定家という作者像や一連の和歌の位置付けには言及せずに、改めて物語単体として本物語を捉え直してみたい。

『松浦宮物語』の特徴は、前掲した三人の女君の存在以外にも、創作の粉本であったと考えられる『浜松中納言物語』の影響に基づいた日本と唐土という舞台設定や転生という手段^⑩、天界と人間界の二項対立^⑪、『うつほ物語』の影響による琴の秘曲伝授というモチーフ^⑫、現実の戦乱（源平の合戦）を意識したような非常に客観的かつ写實的な戦乱描写^⑬、漢籍などに典拠を求めて創り上げられた理想国家や政治描写等々を挙げることができる。本稿では、なかでも最も特徴的であると考えられる、弁少将と女君たちとの恋愛を中心に論考を行う。三人の女君の人物造型および弁少将との恋愛の形態については、先に触れたように三様の歌風に対応しているとの解釈が有力視されているが、ここではあくまで物語の要請としてこれらの女君の存在意義を問うてみたい。まずは三人の女君の個別の物語展開を弁少将との関わりから分析し、物語構造を俯瞰しよう。

一 神奈備皇女の物語の構造

物語冒頭における主人公弁少将は、世の中の若き男性のように色好みではなく、非常に勤勉実直な人物との世評を得ているが、秘かに幼なじみである神奈備皇女に恋情を抱き、苦

悩んでいる。菊の宴の後に皇女に向かって想いを吐露する機会を得るものの、皇女のとまどいを慮って一線を越えることはない。その後は再会する機会に恵まれないまま皇女は帝に乞われて入内、一方の弁少将は嘆く間もなく遣唐副史の宣旨を受け、慌ただしく渡海してしまうという筋が大まかな物語展開である。

弁少将の求愛に対して、神奈備皇女は当初は戸惑いを感じて拒絶をしているが、これは本心ではなく、多分に儀礼的なものである。草子地として、「高欄に寄りゐたる(弁少将の)様かたち、皇女(神奈備皇女)たちにもえ心強かるまじうぞあるや」(二八頁)と、弁少将の美貌に皇女たちはつれなくはできないほど心惹かれていた旨が指摘されており、皇女自身の態度として「大方にも、いと(弁少将を)『あはれ』と見たまへば」(二八頁)と示されることから、弁少将に対してむしろ好感を抱いていることが窺える。弁少将も皇女の気持ちが自らに向いていることを認識しているがゆえに、菊の宴の後に皇女付きの女房に贈った文に「昨日なむ、行くらんなわきも初めて思ふたまへられしかば、嬉しき月日なれど」(二〇頁)と、将来を初めて自覚でき嬉しいと記しているのである。その後の二人の贈答では、用例(B)の和歌(七)にて弁少将が自らの恋情を「燃え」「恋(火)」「嘆き(投げ木)」「焚く」と縁語や掛詞を使用して一層燃え上がる恋心を詠むと、それを受けた皇女が用例(C)の和歌(八)と受ける。

(B) (和歌七) 燃えに燃えて恋ひば人見て知りぬべきなきをさへに添へてたかな (弁少将の詠歌) (二〇頁)

(C) (和歌八) 見てしかば我こそ消なめ燃えに燃えて人の嘆きはたき尽くすがに (神奈備皇女の詠歌) (二二頁)

この皇女の詠歌を萩谷氏は、「少将の熱意を認めたというばかりで、何ら積極的な承諾を与えてはいない」と解釈する。しかし、皇女の贈答歌は必ず弁少将の詠歌の中の一句を引いて詠まれており、このことを踏まえると、「燃えに燃えて人の嘆き」とは、弁少将の詠歌「燃えに燃えて」「なげきをさへに添へてたかな」を指していることになる。よって、「弁少将の熱い想いを見てしまったので、私の方こそ死んでしまいうそうだ。燃えに燃えて弁少将の嘆きを燃やし尽くしてしまいうほどに」と解釈でき、二人は相思相愛の関係にあったと推察できるのである。

相思相愛である二人の関係が端的に表れているのは、入内後音信不通であった皇女から渡唐直前の弁少将の許に贈られた用例(D)の和歌(二三)という詠歌である。

(D) (和歌二三) もろこしの千重の波間にたぐへやる心もとにも立ち返り見よ (神奈備皇女の詠歌) (二四頁)

この歌は、「私(神奈備皇女)の心をあなた(弁少将)の身に一緒に連れ添わせるので、必ず日本に戻って私と逢って欲しい」と解釈できよう。このように見送る者が旅立つ人に自らの心を連れ添わせるという内容の詠歌は『古今和歌集』

をはじめとして、恋人同士の間に例が多く見られる。¹⁹⁾また、平安時代の贈答歌は男が贈り女がそれに答えるのが一般的であり、逆に女側からの贈歌であった場合、そこには女の感情が働き、二人の恋愛関係への危機感が暗示される、あるいは愛情の高揚が潜在していると指摘されている。つまり、女側からの贈歌には、非日常的な和歌を用いることによって日常の言葉ではできかねる意思表示を積極的に伝達し、男との連帯を強化する目的があるのである。今回の詠者たる皇女が、今や帝の甚寵を受ける身でありながらも自分の方から「我が身をあなたに連れ添わせる」と詠んでいることは、弁少将に對してただならぬ好意を抱いていることの告白であるといえよう。

この詠歌を受け取った弁少将は、「血の涙」を流す。「血の涙」という語は、『うつほ物語』においては、親子の離別の悲しみを象徴する語として使用されており、『松浦宮物語』においても、遣唐副史の宣旨に對して嘆き悲しむ両親の様子を描写した後に、弁少将の心情として「弁の君、一方ならず血の涙を流せど、いづれも心になふわがにしあらねば、皇女（＝神奈備皇女）つひに参りたまひぬ」（二三頁）と記していることから、両親との離別の悲しみを表現している。しかし傍線部のように、弁少将が血涙を流す要因は複数存在し、一つは両親との別離、そしてもう一つは直後に描かれる入内した皇女との別離なのである。しかもこの「血の涙」は、も

う一箇所、皇女のみを対象とする場面―皇女から和歌（二三）（前掲用例（D））を贈られた当該場面にも見られる。この場面において弁少将が「血の涙」を流したのは、皇女の情熱的な文によって一度は皇女への想いを諦めた己の心中（用例（E））に、再び熱い想いが蘇ったからであろう。このような物語展開をそのまま解釈するならば、「弁少将と神奈備皇女は相思相愛であったが、皇女の入内および弁少将の渡唐という二つの障碍が立ちはだかり、引き裂かれることとなった」という悲恋譚となるのだが、果たしてそのように単純に考えようのだろうか。

弁少将と神奈備皇女の恋愛譚として描かれる右記のような物語展開は決して目新しいものではなく、描写される場面や人物の行動も類型的なものに過ぎない。本物語を三角氏は、「極論すれば、作者定家は筋の進行にしたがつてその都度場面を組み立てていく、そういう創作方法しか持ちあわせていないのであった」と評しており、皇女との恋愛譚の部分などはまさに氏の批評を裏付けるものであるといえよう。このように本物語序盤における皇女との恋愛譚そのものは、物語としての魅力に乏しいあたりなものにすぎないのであるが、その一方で入内や渡唐といった別離に對する弁少将の心の動きを詳細に追ってみると、先行する物語の男君とは全く異なった心理を読み取ることができる。

用例（E）の和歌（三）「恋死なば恋も死ぬべき」、前掲用

例(B)の和歌(七)「燃えに燃えて恋ひば」というフレーズには、皇女に対する弁少将の熱い想いがみなぎっているのだが、皇女の入内を聞くや用例(E)の和歌(二〇)の下句に現れているように、弁少将は恋の成就をあっさりと断念し、「朝夕の宮仕へにつけて、耐へがたき心(＝神奈備皇女への想い)をも、なかなか一方に思ひ絶ゆばかり漕ぎ離れなんも、一つには嬉しけれ(二三頁)」と、唐土への渡航によってその悲しみを紛らわせようとする。

(E) (和歌三) 恋死なば恋も死ぬべき月日経ていかに物

思ふ我が身とか知る

(弁少将の詠歌)(一九頁)

(F) (和歌二〇) 山の端を出でつる月のすむ空の空しくなり

ぬ我が恋ふらくは

(弁少将の詠歌)(二三頁)

先行する『伊勢物語』の昔男や『源氏物語』の光源氏は、恋する女性が帝の御妻であっても、その障碍を乗り越えようとする強い信念を発揮して行動しているのに対し、弁少将はそのような発想を抱くことはなく、ひたすら皮肉な運命を嘆くのみである。ここには、かつて皇女に贈った和歌(前掲用例(B)(E))に見られる熱情はもはや感じられず、そもそも皇女への想いが真実深く激しいものであったのかという疑問すら感じられる。

弁少将の神奈備皇女への恋情に対する疑問は、彼が唐において華陽公主と遭遇するに至って更に拡大することとなる。

「恋い死ぬほどに皇女のことを想っている」(前掲用例(E))

と詠んだ弁少将が、第二の女君である華陽公主と出会うやいなや一目ぼれをしてしまう。そして皇女と比較した上で「故郷にて『いみじ』と思ひし神奈備皇女も、(華陽公主と)見あはするに、鄙び乱れたまへりけり(四〇頁)」と、皇女を野暮つたいものとして貶め、「秋の月のくまなき空に澄み上りたる」(四〇頁)ような上品さ、崇高さを持った華陽公主の方が一際優れているとの感想を抱いており、ここにおいて物語における神奈備皇女との存在感は速やかに失われてしまっている。

このような物語展開から、神奈備皇女は華陽公主や鄧皇后と比肩し得るような恋愛対象ではなく、渡唐前の主人公の一エピソード、あるいは唐土にて出会う華陽公主の素晴らしさを強調するための比較対象としての価値程度しか持ち得いないと考えられてきた。すなわち、皇女の魅力を貶めることによって相対的に華陽公主の存在価値を高める表現手法を採用していることになる。しかし、本物語のように弁少将が皇女に求愛し相思相愛となった後に、より優れた華陽公主に心惹かれるという展開は、単に皇女の魅力を失わせるのみならず、弁少将の人間性をも貶めてしまう危険性がある。「色好み」ではなく「まめ人」として設定されたはずの弁少将が、皇女と華陽公主とを引き比べた上に、ひとたびは深く想いをかけた皇女を簡単に見放すような態度は、例えば『石清水物語』の秋の中納言に見られるような「色好み」的であり、そこに『源氏物語』の光源氏のような誠実さを見出すことはできない。

また、物語の最終盤において弁少将が帰朝した際には、今度は皇女の側から弁少将に働きかける場面が描かれていることも注目に値しよう。神奈備皇女が前述のように華陽公主を引き立てる役割しか持ち得ていないとすると、帰朝後の再登場は非常に不自然である。渡唐後の弁少将には、もはや皇女への執着は全く存在しておらず、最終盤において解決せねばならないような課題は残されていない。それにもかかわらず皇女は物語に再登場し、帰国した弁少将から音沙汰がないことを不審に思うあまり、用例（G）のように自ら和歌（六八）を贈る。それに対する弁少将の返答は、「唐土で我が身はすっかり変わってしまったから」、「自分と皇女とは身分が違い恐れ多い」と皇女を拒絶する内容であり、それに皇女が深く落胆する様が描かれている。

（G）……ただかかる（弁少将との）契り一つにや、（弁少将）「げに（華陽公主は）琴に引かれ来にける身」と思ひ知らるるには、もとの国人（＝神奈備皇女）、情けばかりの言の葉だに絶えてうち忘れたまへるに、神奈備皇女、「あやしうも変はり果てにける（弁少将の）心かな」と、ねたうおぼすにや、

（和歌六八） もろこしや忘れ草生ふる国ならむ人（＝弁少将）の心のそれかともなき （神奈備皇女の詠歌）

とのたまへるにぞ、（弁少将は）昔のこともおぼし出づる。
（和歌六九）「もろこしの千重の波間に浮き沈み（私の）

身さへ変はれる心地こそすれ （弁少将の詠歌）

かしこさに」とあるを、（神奈備皇女は）「心やまし」と見たまふ。
（二三四～二三五頁）

帝の寵妃たる神奈備皇女からのアプローチをすっぱりと切り捨てるのみならず、自らの心変わりを棚に上げて皇女が入内してしまったことをあげつらう弁少将の態度からは、皇女に対する思いやりは全く感じられず、主人公に対する読者の感情移入を阻害しかねない描写となっている。主人公である弁少将の人間性を損なうようなこのエピソードがあえて挿入された意図を考えるに、最終盤における皇女が存在が単に華陽公主を持ち上げるためだけのものにとどまらず、独自の役割を担っているということを示唆している。この点を踏まえて、皇女の物語を再検証してみたい。

神奈備皇女の物語において、入内の決まった皇女を簡単にあきらめてしまいい、渡唐後には華陽公主に心奪われた挙句に、帰国後の皇女のアプローチを一蹴するという弁少将の一連の振る舞いは、主人公としての魅力に欠けるといわざるを得ず、読者が肯定的に受け入れたとは考えがたい。このように皇女との物語を弁少将の視点から解釈すると、非常に不満の多い内容となってしまう。ここで視点を転じて皇女の立場から物語を捉え直してみよう。彼女は優れた貴公子である弁少将に求愛され、彼女自身も弁少将のことを憎からず想い始めた矢

先に入内および弁少將の渡唐のことが決まり、弁少將との仲を引き裂かれてしまうことになる。それでもなお弁少將に想いを残していた彼女は、唐土に向かう弁少將に「私の心を連れ添わせて」と詠歌（前掲用例（D））を贈り、その帰国を待ちわびていた。ところが帰国した弁少將はすでに別の女性に心奪われており、もはや相手にしてもらえなかったという女側から見た失恋譚と解釈できる。ここでのキーワードは、皇女にとって弁少將は「初恋」であること、「相思相愛」関係でありながらも二人は事情により「別離」してしまうこと、男側の心変わり（「新しい女の存在」）によって「女が男に捨てられる」ことである。女が男の心変わりによって捨てられてしまう恋愛の例は枚挙に暇がないが、先に挙げたキーワードと重ね合わせることによって、『伊勢物語』二三段「筒井筒・二四段「梓弓」の物語を想起することができる。二つの段については、待つことをめぐった情愛と男女のあやにくな三角関係の人生を扱い、表裏の関係にある章段として捉えられている。二三段においては、発端に井筒の女と男の初恋が描かれ、その後男が高安の女（新しい女）に浮気するものの、井筒の女は待ち続けることで再び男の愛を手に入れている。しかし逆に二四段では、相思相愛の男女が事情によって別れ、女は待ち続けることができずに新しい男の求愛を受け入れる。その矢先に現れた元の男を女が拒絶するものの、本心では元の男を忘れられず、想いの丈を吐露するが今度は男に拒絶さ

れ、女は死ぬ。神奈備皇女の物語の設定については、二三段で一人の男に対して筒井筒の女と高安の女が配置されているように、弁少將をめぐって華陽公主と三角関係になつてはいるが、初恋の相手である筒井筒の女のように、離れた男の愛を取り戻すことはできていない。むしろ神奈備皇女の物語の内実は、新しい男（帝）の求愛を受け入れながらも真の愛情は元の男（弁少將）にあり、そしてその想いを投げかけても元の男に拒絶されてしまう二四段の女の様相に近いと考えられ、そうであれば、やはりこの物語は弁少將を主人公として専ら彼の視点から描かれてはいるものの、むしろ女性側の立場から解釈されるべきものであろう。二四段においては女側に新しい男を受け入れるかどうかの選択が委ねられており、新しい男の求愛を受け入れたことが女側の裏切り行為に当たるのに対して、神奈備皇女の場合には自らの与り知らないところで入内が決定されており、皇女側に落ち度らしい落ち度は見当たらない。それどころか、渡唐する弁少將に対して入内後の身でありながら「私の心を連れ添わせるので、必ず日本に戻って私と逢って欲しい」という内容の和歌（前掲用例（D））を贈る行為は、精神的には帝に対する裏切りに相当するものであり、皇女の激しい恋情を読み取ることができよう。このように、入内および弁少將の渡唐という不可抗力によって二人の仲は引き裂かれたものの、男を信じて待ち続けた皇女こそが、この物語において読者が共感すべき対象なのであ

り、弁少将はむしろ彼女に嘆きをもたらず不実な男という負の存在として機能していると結論付けることができる。

二 華陽公主の物語の構造

神奈備皇女の次に登場する女君は、唐土で出会った華陽公主である。彼女は弁少将に秘曲を伝授する琴の達人であり、後に仙女の生まれ変わりという設定が明かされる。そもそも弁少将と華陽公主の関わりは、弁少将が謎の老翁陶紅英から「人の国に琴の声を伝へ広むべき契り」(三六頁)によって渡唐し、「かの公主(＝華陽公主)の手より、この音(＝琴の音)をば伝ふべき人」(三七頁)であることを示唆され、誘導されたことによる。そして華陽公主に出会った、たちまち神奈備皇女への熱情を失い、逆に用例(H)に表れているように公主への恋情にとらわれることとなる。

(H)(和歌三) たまきはる命を今日に限るとも身をば惜し

まじ君(＝華陽公主)をしぞ思ふ(弁少将の詠歌(四五頁))

琴の秘曲を伝授された後、弁少将の命に代えた深い愛情に対して華陽公主はただ一度の逢瀬を約し、最終的には弁少将の故郷・日本において結ばれることとなる。しかし、そこに至る過程が恋愛物語としての魅力に富んでいるかという点、決してそうとは言い切れない。詳しくは以下に論述するが、前項にて引用した三角氏の言葉の通り、『松浦宮物語』の恋愛描写は平明単調であり、あまり面白くはないのである。

神奈備皇女との恋愛譚においては、弁少将が巧みに機会を活かして皇女との接触に成功する場合が描かれているが、唐土において弁少将はそのような主体性を全く発揮することなく、ひたすら華陽公主との再会を待ち続け、面影を求めて思い悩むのみである(用例(一))。

(一)(和歌二九) 大空の月(＝華陽公主)に頼めし暮れ待つ

と山の雲に袖は濡れつつ

(弁少将の詠歌)(四五頁)

例えば、華陽公主と九月十三日の再会(二回目の秘曲伝授)を約した後には、皇帝が弁少将を手元に置いて離そうとしない日々が描写され、逢瀬の実現が困難であることが暗示されるものの、弁少将はただ逢瀬の日を待つだけであり、困難を打破するための積極的な行動を何ら起こそうとはしない。ところが、公主との約束の日になると突然皇帝の体調が悪くなり、弁少将は難なく公主と逢うことができるのである。ここで読者は逢瀬に対する障碍の存在を予感し、主人公の葛藤や果斷、そしてその結果としての波乱を期待したはずであるが、実際の物語展開はそのような読者の期待には全く応えていない。同じく、禁中の五鳳楼における十月三日の逢瀬の際においても、「宮のうち、常よりも兵いつくしく、わづらはしき気色なれど」(四九頁)と逢瀬の困難さを示唆する描写があるにもかかわらず、何事もなかったかのように二人は再会を果たしている。光源氏が藤壺中宮の里下がりの時を狙って逢瀬を叶えたように、男主人公の機転や決断によって逢瀬が成立す

るといった展開は、この華陽公主や後述する鄧皇后との恋愛過程に一切見ることはできない。全ては女君側の誘導²⁸によって段取りよく物語が進んでいるように描写されており、このことが弁少将を主人公とみなして物語を享受する際には非常に物足りなさを感じさせる一因となっている。

恋愛物語においては、社会的な制約から生じる障碍の克服、あるいは挫折が扱われることが多く、恋愛物語の原点とされる『伊勢物語』にしても、すでに身分差や近親愛などの社会的障碍が設定されている。恋愛成就に対して社会通念上の問題がある場合、登場人物が努力や英断によってその障碍を乗り越える様子を示し、恋愛成就として読者に満足感を与える、あるいは苦悩の果ての挫折を通して悲恋・失恋という形で読者の共感を誘うことによって、物語としての魅力を高めているのである。障碍とは、言い換えれば、恋愛を成就することと他の価値―例えば地位や世評、交友関係など―との二者択一を強いることでもあり、登場人物にどのような選択をさせるかという部分に作者のメッセージを読み取ることができるのである。本物語では、前項の神奈備皇女との間には入内という障碍が発生したものの、弁少将はそれを克服しようとはしなかった。一方で華陽公主との恋愛においても障碍の存在を予感させる描写が随所に見受けられるにもかかわらず、実際には機能しておらず、二者択一的な展開は全く現れていない。弁少将は華陽公主との恋愛成就において何一つ選択を

行っておらず、また何一つ失ってはいないのである。

やがて晴れて秘曲の全てを伝授された日に用例(H)の詠歌に見られるように、弁少将は自らの想いを吐露することとなる。それを受けて華陽公主は「この琴の音を伝へ、かくまで(弁少将と)馴れぬるも、契りのなきにはあらず」(四六頁)と、二人の関係は琴によって結ばれた縁だけでなく、男女の縁として世の謗りを負ひ、身を滅ぼす要因となるべきものであるとの見解を示す。ここでの「世の謗り」とは、先にも問題にした社会的障碍、すなわち身分差があり、異国の人間同士の恋愛に関する社会通念上の制約を指すのであろうが、そのように言いながらも華陽公主自身の認識としては、二人が結ばれることは「逃れがたい縁」(二六頁)から生じたものであるから、決して「心の過ち」(二二六頁)、つまり罪に問われるような過失ではないと捉えている。そこには、社会の目に対して後ろめたいという感情は微塵も存在していないのである。社会規範の中心ともいえる禁中の五鳳楼を逢瀬の場と指定していることなどは、華陽公主が自らの行動に対して何ら後ろめたさを感じていないことの証左であろう。

唐土においては達成しがたい弁少将との恋愛を成就するために華陽公主が選択した手段は、命を象徴する水晶の玉を弁少将に托して自らは昇天し、やがて弁少将が帰国後に泊瀬で祈禱を行うことによって復活を遂げるというものであった。公主と弁少将の恋愛については、先行作品である『浜松中納

言物語」内の河陽県の後と中納言との関係を意識していると言われている。²⁹この『浜松中納言物語』では、唐土と日本、身分や立場の違い二人が互いに思慕の情を寄せ合った場合の解決方法として、転生が利用されており、極楽往生の望みも差し置いてまで恋慕う中納言の元に転生しようとする河陽県のための恩愛こそが主題となっている。しかし、河陽県のための転生については、『無名草子』で次の用例（J）のごとく否定的に評されている。

（J）「河陽県の後、切利天に生まれたる」と空に告げたるほどだに、いとまことしからぬに、また、「かの后、吉野の君の腹に宿りぬ」と（中納言が）夢に見たるほどなど、乱りがはしく、切利天の命はいと久しくあなるを、「いづのほどにかまたさること（＝転生）はあらむ」などおぼゆるこそ口惜しけれ。（七九頁）

『無名草子』の作者は『浜松中納言物語』の一読者として作品の優秀さは認めつつも、河陽県の後が切利天、果ては異母妹である吉野の姫君の腹に転生する物語展開を「まことらしからぬ」とし、「そのことなからましければ」「口惜しけれ」と否定しているのである。これに対して『松浦宮物語』では、公主は昇天した時の姿のまま弁少将の前に復活を遂げており、状況としては転生よりもむしろ「駆け落ち」としての読み替えが可能な状況と考えられる。駆け落ちという手段による恋愛成成は、『伊勢物語』二条後の例を引くまでもなく、やは

り社会通念上許されることではないのであるが、華陽公主がそのことを気に病む様子は作中にはまったく見られない。これは、華陽公主にとっては唐の皇妹としての立場は仮のものであり、仙女としての立場が本質であるということの意味しているのであろう。公主は、秘曲を伝授した商山では弁少将の想いを受け入れることはなかった。それは、商山の高楼が用例（K）において説明されているように、日月地神が守護し、琴にまつわる仙人たちが集う聖地であるからである。

（K）（華陽公主）「この楼（＝商山の高楼）は、昔、聖の建て置きし時より、いさぎよき地として、さらに乱ることなし。日月空に知り、地神下に守りたまふ所なり。…仙人時々通ひて、琴をつくるひ、楼を飾る。我もこの世に長かるまじければ、一生の後、必ずここに通ひて、琴の音を聞かんとす。かかる誓ひあるところに、長く憂き跡をとどめ、あるまじき心（＝弁少将への恋情）を見えなば、天地の待ち見むこと恥づかしければ、生きても死にても、身には通ふまじ。…」（四六頁）

一方で、公主は禁中の五鳳楼での逢瀬においては自らの心情を吐露し、弁少将を受け入れていることから、現世における権力や秩序の中核である「禁中の五鳳楼」よりも琴の聖地「商山の高楼」を重視する価値観を読み取ることができる。このような公主の価値観は、「自分はこの現世に長くは生きることはできず、一生を終えた後は他の仙人のように商山で琴の

演奏を聞くつもりだ」(用例(K) 傍線部)や、弁少将と再会の約束をする際に「かりそめの命を捨てて必ず来世で夫婦の縁を結ぼう」(用例(L) 傍線部)などと、今生きている世はあくまでかりそめのものとして軽んじ、仙女としての立場を重んじていることを確認することができる。華陽公主にとつては「商山の高樓」という聖地がなによりも重要なのであり、最後までその地を侵すことはなかった。その上で、本来は仙人として商山にとどまり続けるべき運命を放棄してまで、弁少将との恋愛を成就するために日本に転生することを選んだのである。

(L) (華陽公主)「まことに(弁少将が)我を偲ぶ心深く、あらぬ国(＝日本)にても忘れたまふまじくは、今宵あだの命を失ひて、必ず後の世の契りを結ばむ」とのたまひて… (五〇頁)

引き続き華陽公主が昇天した後の物語を検証してみよう。弁少将が公主から託された玉は公主の命そのものであり、重要極まりないものである。しかしその後は、「玉を身放たず持ちて、いみじき雨風の騒ぎ、波の下なりともつひに落とし失はで、我が国(＝日本)に帰」と、極めて簡潔な描写がなされているに過ぎない。そして帰国後には、華陽公主の言葉通りに玉を初瀬にて供養することによって公主が復活する様子が描写されているものの、困難な修法がわずか一行の記載によって難なく達成されてしまっており、物語としての盛

り上がりは感じられない。やがて公主は弁少将の妻となつて子を身籠もる。三人の女君の中では唯一、最終的に弁少将と結ばれた人物であるが、鄧皇后が形見として弁少将に渡し、鏡を通して移った香りに嫉妬を覚え、苦悩する姿が物語末尾に描写されており、幸福な将来を想像することは難しい。

以上議論してきた華陽公主に関するストーリーの特徴は、以下の二点にまとめることができよう。二点目の特徴としては、弁少将の主体性および活躍の場の欠落を指摘することができる。唐土における逢瀬は当初は陶紅英によって、その後は華陽公主によってお膳立てされており、弁少将の側の主体的な働きかけは皆無である。逢瀬が困難であるような場面においても、その障碍は弁少将が何もしないうちに自動的に解消されてしまっている。昇天した華陽公主を復活させる場面においてすら、弁少将の行動に重要性は見られない。

二点目の特徴は、華陽公主との恋愛を妨げるかのように設定されている社会的障碍は、作中では決して機能しておらず、琴にとつての「聖地」たる「商山の高樓」のみが実質的な制約として働いていることである。恋愛を成就するために華陽公主は昇天および生前の身さながらの日本への転生という手段を選択しており、これはむしろ社会通念上は無責任と受け止められかねないものであるにもかかわらず、当人たちがそのことを意識することはないし、物語もそれを是として進行

してゆく。

華陽公主との恋愛譚を弁少将の視点から解釈する限りにおいては、これら二点の特徴は物語の魅力を減じてしまうマイナスの特徴である。ここで神奈備皇女の場合と同様に華陽公主の恋愛譚についても女君の側から解釈を行うことによって物語に新たな側面を見出すことができる。

(M) (和歌三〇) 玉の緒の絶ゆるほどなき世の中をなほ乱る
べき身の契りかな (華陽公主の詠歌) (四五頁)

用例 (K) および (M) の和歌 (三〇) 傍線部に述べられているように華陽公主自身は自らの寿命が長くないことを認識しているが、それは弁少将との恋愛に起因するものではなく、彼女の本来の運命であったことが分かる。そして、聖地である商山の高樓に仙女として通って琴の音に耳を傾けるはずであった公主の来世は、弁少将との出会いによって大きく変化してしまうことになる。「この方 (＝弁少将との恋愛) に乱れあらば、必ず身を滅ぼすべき我が身」(四七頁) といったながらも弁少将との逢瀬を持ち、自らの魂ともいうべき玉を与える華陽公主の行為は、本来の自らの運命を歪めてしまう行動であり、仙女としての使命の上からも禁忌とされる許されざる行為であろう。入内後に帝を精神的に裏切るような和歌 (前掲用例 (D)) を弁少将に贈った神奈備皇女と同様に、華陽公主もまた禁忌を犯してまで弁少将との恋愛を貫こうとしている。神奈備皇女や華陽公主との恋愛譚においては、主人

公である弁少将が何の決断も下さずただ悩むのみであるのに対し、むしろ女君たちが積極果敢に運命を切り拓こうとしているのである。ただし、物語はあくまで弁少将の視点・主観から描かれており、女君たちの心情が直接描写される場面はほとんど存在しないため、このような物語構造を看取するためには、弁少将に対して女君が発した言葉や贈った和歌などから推測するしかない。そして、次項にて分析を行う三人目の女君、鄧皇后についてもまた、同様の考察が可能となるのである。

三 鄧皇后の物語の舞台―戦乱勃発から平定まで

最後に三人目の女君である鄧皇后 (梅里の女) を取り上げてみよう。鄧皇后に関わる物語は文皇帝没後の戦乱場面から平定後の梅里の女との逢瀬までを含めると紙面の六割以上を占めており、三人の女君の中では弁少将が最も深く心奪われている様子が描写されている。このことから、本物語の女主人公であるという向きも多いが、一方で当初の構想には鄧皇后は含まれていなかったのではないかという指摘も存在する。

石井由紀夫氏は『松浦宮物語』の構想が破綻していることの一根拠として、巻一には登場しない鄧皇后と宇文会とが巻二において突如役割が増大していることを挙げている。華陽公主の昇天後に始まる戦乱において弁少将は鄧皇后の知遇を得るに至るが、この戦乱描写が非常に唐突に始まり、それま

で現れていなかった宇文会という人物が突如重要な敵役として登場していることから、華陽公主の物語を書き終えた後に当初は予定されていなかった戦乱描写や鄧皇后との恋愛譚を急遽追加したのではないかとの推測がなされている。しかしながら、弁少将に華陽公主を紹介した陶紅英の言葉に「我が国（＝唐土）、大きに乱るべきによりて、またあひ見むことかたし」（三八頁）と、華陽公主との邂逅前の時点ですでに戦乱勃発の予言が示されているのである。また、華陽公主との恋愛譚の間に皇帝が病に臥す場面が挟み込まれており、そこで「汝（＝弁少将）は必ずひとたびは国を平らぐべき相あり。：汝必ず太子に従ひて、恐れ逃るる心なかれ」（四八頁）との遺詔を弁少将に与えていることから、後に起きる戦乱に向けての伏線が用意されていることが分かる。あるいはもっと早い時点から、それこそ弁少将が遣唐副史として長安の地に着いた当初から皇帝によって破格の厚遇を与えられ続けていたことは、やがて訪れる戦乱にて弁少将が皇帝の遺族を守って活躍することの伏線であるとも考えられよう。異国人であり、若輩者の弁少将への過剰な寵遇を群臣が諫言するのに対し、皇帝は「ただそのかたち、心に従ふ」ことを重視して人材登用を行うべきだと、その誠めを一蹴してしまう。さらに皇帝は幼い皇太子と弁少将とをしきりに接触させようとしており、この行動は群臣たちのさらなる不審を招いている。このような皇帝の過度の寵愛は、先に挙げた遺詔「汝必ず太子に従ひ

て、恐れ逃るる心なかれ」（四八頁）に繋がる伏線であると考えられ、本物語が戦乱の勃発と、その際の弁少将の活躍を予め予定した上で執筆されていたことを示唆しているのである。これほどまでに皇帝が弁少将を見込んだのは、彼が自らの死後に発生する戦乱平定のために天界から遣わされた人物であることを承知していたことによる。皇帝は弁少将に対して「前の世の契りありて、つひに我が身（＝皇帝）に離れぬゆゑあるべし」（四八頁）と、二人の関係が因縁宿世によって結ばれていることを示唆し、「もとの位卑しく、齢至らずとも、その勲功あらば、官位を惜しまるまじき」（七〇頁）との書き置きを残すことによって弁少将の便宜を図っている。これは後日の鄧皇后の告白においてそのゆえが明かされることになる。鄧皇后もまた、天帝の命により「この国（＝唐土）に生をうけて、乱を治め、国を興すべき御使ひ」（二三頁）として派遣された人物であり、弁少将と同じく戦乱平定という任務を担っていた。弁少将と鄧皇后の大きな違いは、鄧皇后は自らが天人であった記憶を有し、戦乱平定という任務を認識しているのに対して、弁少将にはそのような記憶は残されていない点である。そのため、戦乱勃発時には弁少将は、華陽公主との約束の玉を守ることに心を砕き、戦乱平定のために尽力しようという考えは全く持っていなかった。そのような弁少将に対して鄧皇后は、皇帝への恩に報いるためにも防戦するよう要請する。若年の異国人であり、そもそも武官

ですらない弁少将にこのようなことを依頼するのは不自然ではあるが、天帝から派遣された弁少将が住吉神の加護も受けて宇文会との対決で勝利をおさめ、この戦乱を平定することを鄧皇后は予め確信していたのである。

鄧皇后の期待に違わず、弁少将は超人的な能力を発揮し、独力で敵方の有力な武将であり阿修羅の化身である宇文会を討ち取るなどして活躍するものの、先に述べたように弁少将は決して積極的に参戦したわけではない。鄧皇后直々の依頼によって助力する覚悟を決めるが、その後の作戦展開や重要な方針については全て鄧皇后が判断を下しており、弁少将は鄧皇后の言うがままに振る舞った結果として、自らが思いも寄らなかった能力を発揮し、戦功を挙げるに至っている。すなわち、この戦乱平定という場面においても、華陽公主との恋愛譚と同様に、弁少将には主体性はほとんど見られず、もっぱら鄧皇后の指示に従う姿が描出されているのである。

四 鄧皇后の物語構造―梅里の女としての逢瀬

戦乱中の弁少将は、鄧皇后に対していたわしさを感じる程度の感情しか抱いていない（用例（N）傍線部）のだが、戦乱が治まった後には突如として鄧皇后に強く心惹かれてゆく様が描写されている。そして用例（O）の「華陽公主の」玉を得てからはほかの女性に心を移すことはなかったが、鄧皇后の姿を見るや強く心惹かれるようになった」との描写からは、

かつて弁少将が神奈備皇女と華陽公主とを引き比べて女の優劣を決めた時と同様に、今回は華陽公主（用例（O）傍線部）以上に鄧皇后の方が優れている（用例（O）二重傍線部）と感じていることが確認できる。

（N）かたじけなくうち向かひたまへる（鄧皇后の）顔、かたち、御声、気配の、きよらにうつくしうらうたげなること、御位のほど限りあるにや、（弁少将は）あはれに悲しう見捨てたてまつりがたきに…（五九頁）

（O）（弁少将は）…心の乱れし衣の裏の玉（華陽公主から渡された玉）を得ては、また分くる心を思ひ離れしかど、ただ（鄧皇后を）うち見たてまつるより、のたまひ出でつる御言の葉を背くべき方もなく、二人の親の待ちたまふらん故郷を、今片時も「いかでか」と思ふ命をだに、こ（鄧皇后）の御一言葉に変へんは、え惜しむまじう、

あはれに悲しう見たてまつるまに…（八〇～八二頁）

このような弁少将の前に、鄧皇后が仮の姿である梅里の女として登場することで二人の恋愛は進展する。この恋愛は藤壺中宮と光源氏の密通を念頭においているとの指摘もある^①。鄧皇后は皇妃であり、十三歳で入内した後十年を経ていることから現在には二十三歳という設定になる。そして十八歳である弁少将との関係は、『源氏物語』若紫巻における藤壺中宮二十三歳、光源氏十八歳と合致しており、意図的な設定である可能性が指摘できる。

また、『松浦宮物語』の物語構想についてはつとに『浜松中納言物語』との類似性が指摘されている。特に、弁少将が鄧皇后とは知らずに梅里の女と契りを結ぶくだりは、『浜松中納言物語』巻一、中納言と河陽県の後との関係に酷似している。その『浜松中納言物語』に大きな影響を与えたのが、『源氏物語』である。これらの物語では、「帝の妻を過つ」という筋立てが重要なモチーフとなっており、密通の結果、天皇在世中に不義の子が生まれ、その子どもの処遇に苦悩する姿や罪の問題に焦点が置かれて描写される。『松浦宮物語』においても不義密通という要素が胚胎しているにもかかわらず、恋愛が開始する時点ですでに皇帝が崩御していることから不義性はやや薄いといえよう。とはいえ、鄧皇后は国家の統治者であり、幼帝の実母でもあることから、たとえ梅里の女という仮の姿であるとしても、易々と恋愛関係を成立させてよい立場ではない。ところが弁少将は、梅里の女と鄧皇后が同一人物であることを知った後も、国母との密通が重大な問題である点に思いを巡らすことはなく、「ただもう一度の逢瀬を持ちたい」「鄧皇后との恋はこれで終わってしまったのか」などと私的な恋情ばかりに捉われている。

一方の鄧皇后は、用例(P)に見られるように、自らの恋愛が天帝の命から逸脱していることは自覚している(用例(P) 波線部)ものの、先皇帝や現皇帝をはじめとする「現世」に対する罪悪感を持つことは全くなく、華陽公主の場合と同

様に社会的障壁はほとんど機能していない。

(P) ∴ (鄧皇后) 「∴この世(＝人間界)には交じりながら、なべての目に見る人は、けがらはしう、疎く、はるかにのみ思ひ慣らへるに、(弁少将と) 昔のよしびの親しく、忍ばしき(自らの) 心のうちをだに、(弁少将に) 知られで止みなむことを思ひし心の怠りに、人の身をうけてけるまどひのおろかさをえ覚まさで、言ふかひなく乱れにける夢(＝梅里の女としての逢瀬)のはかなさを、ただ思ひ分くところなき心軽さばかりに、(天帝に) 咎を仰せられんも、今ひとしほの身の憂さにや」と思ひ悩むあまりに、「残しとどめずなりぬるこそ、一方ならぬ心浅さにや」と、なほ罪さりどころなけれ」とのたまはするを∴

(二二四―二二五頁)

それは、天帝の命によって人間界に生まれることとなった鄧皇后にとつては、傍線部に見られるように「人間世界で普通に見かける人間は汚らわしく厭わしい」と感じたり、「(天界へ) 帰らん道も疑ふところなければ、さらに惜しむべき世の別れならねど、かりそめにも父母所生の身(＝人間の身)をうけつれば」(二二六頁)と語っているように、天界こそが真の世界で、現世はあくまで仮の世界なのであり、そこにおける生は決して本質的なものではないゆえであろう。かりそめの生であるからこそ、現世における人間関係を基とした社会的障壁は鄧皇后にとっては意味をなさないのである。ところ

が、そのような無意味なはずの現世の制約によって、愛する弁少将が自らの元を去って帰国することになり、加えて自らが彼の帰国を推進せねばならない立場になるという、あやにくな運命が鄧皇后を待ち受けている。以下に弁少将と鄧皇后（梅里の女）の恋愛過程を詳しく見ていくことにする。

弁少将が鄧皇后への恋情に心を悩ませていた頃、所在ない気持ちで慰めるために彷徨し、辿り着いた梅里で邂逅したのが梅里の女である。梅里の女は弁少将の求愛を拒絶することなく受け入れているが、自らの素姓については明らかにしようとしないうとしない。そのため弁少将は躍起になって女の居所や素姓を探ろうとするものの、全く手立てがない状態である。男が女を訪ねるといふ一般的な逢瀬とは異なり、以降の二人の逢瀬は常に鄧皇后（梅里の女）の超常的な力によってお膳立てされ、恋い焦がれている男の元へ女が訪れる形態となっている。ここでの弁少将は、華陽公主の場合と同様に受動的な態度に終始しており、従来の物語と比べると男女の主体性が完全に逆転している。このような主人公の立場に関して、萩野敦子氏は「見る」力の欠如という論点で検証を行っている。萩野氏のいうところの「見る」力とはすなわち、主體的に判断行動する能力と考えることができる。氏の詳細な分析により、従来の物語では男主人公が有していたそのような能力は、本作品においては逆に女君の有するところとなっている

ことが明らかにされ、この時代における男女の地位の変転が指摘されている。無論、時代性は見逃してはならない重要な要素であるが、本作品のように男主人公の主体性があまりにも否定されているという部分に、単に時代性としては片付けられない作者の意図が隠されている可能性がある。

もう少し正確に述べるならば、渡唐前においては神奈備皇女に対して機会を捉えて自ら求愛している姿が描かれていることから、弁少将は必ずしも完全なる受動者として設定されているわけではない。また、第二章の華陽公主との恋愛譚の部分で検証したように、唐土においても弁少将が主體的に障碍を打破して逢瀬を実現する展開の伏線が散見されるにもかかわらずそれを活用せず、あえて弁少将を受動者として設定したのはいかなる理由なのであろうか。

弁少将が受動的であるということは、言い換えれば、唐土における恋愛は華陽公主あるいは鄧皇后が能動的となっていることになる。つまり、本物語は弁少将を主人公とし、弁少将の視点を通して物語が語られているために分かりにくい。弁少将は唐土における恋愛を推進する主体ではなく、むしろ客体である恋愛対象として設定されているのではないだろうか。弁少将が恋愛対象であるとするならば、この物語における真の主体は鄧皇后であろう。以下、鄧皇后の側から物語を捉えなおしてみよう。鄧皇后は、公としての立場と私的な感情との間で板挟みになった結果、自らの正体を隠して弁少将

との逢瀬を重ねており、最後に素姓や真相を告白する場面に至るまでの感情の鬱積など、様々な想いや悩みが描出されている。例えば、国家の統治者としての鄧皇后は、弁少将が課せられた任務を遂行し、滅亡の危機に瀕していた唐土を救出・復興させたことへの強い報謝の念を持っており、弁少将に「時の政を授け、国の半ばを分かつ」褒賞を与え、唐土に滞留することを望む。しかし弁少将の帰国は宿命としてすでに設定されていることから、離唐を公的に認め、推進せざるを得なかった。その一方で、皇后としての体面を保ちながらも、弁少将の帰国による別れの悲しさを率直に告白したり(用例(Q) 傍線部)、次第に弁少将への個人的な思慕の情を吐露するようになる(用例(Q) 波線部)。特に用例(R)の鄧皇后の詠歌は、「すずろにあはれ忍ばれぬにや」からも分かるように、弁少将が抱く自らへの恋情を受けて突発的に詠まれたものである。その内容は他者の思惑を配慮して、表向き満遍なく照る月の公平さを詠んだものであるが、鄧皇后の本心はその後の「移し心は」にある。『万葉集』三〇五八歌の「うち日さす宮にはあれど月草のうつし心は我が思はなくに」という、他人も分からぬ日本の古歌を引用することにより、その引歌の持つ相手への一途な想いを打ち明けているのである。本作品では為政者としての鄧皇后の姿が数多く描写されており、理想的な政治を体現している表現が随所に見られる。このような記述は物語を鄧皇后側から捉え、梅里の女として、

そして最終的には鄧皇后自身としても弁少将への恋情を抑えきれない姿との対比を行ってこそ強い印象を伴って読者に受け入れられると考えられよう。

(Q) (鄧皇后)「…恩をも報ひがたく、別れをも惜しみがたきによりて、思ひ知る心は山よりも高く、海よりも深けれど、惜しき月日の過ぎゆく別れ(=弁少将の帰国)を、『今しばし』とだにとどめぬなむ、いと悲しき。何の深きことわりよりも、…(弁少将が)我が軍の先として、人の心を励まされにし日、(私は)はるかに見送りしより、『はからざる世にまた巡らはるる(私の)命なりとも、(弁少将のために)惜しむまじう心に誓ひて志のほどを思ひ知りけり』とだに、何事にかは、思ふばかりの色は(弁少将に)見ゆべき」とのたまはするまゝに…

(R) (弁少将が)落つる涙をかき払ふ気配の、すずろにあはれ忍ばれぬにや、
(七九〇八〇頁)

(和歌三七)「天つ空よそなる雲も乱れなむ行く方去らぬ月(=鄧皇后)とだに見ば
(鄧皇后の詠歌)

『移し心は』とかや」
(八三頁)

最後の告白において、鄧皇后は自らが天人であったことを明かす。その際に華陽公主と弁少将との恋愛や秘曲伝授、その際の公主の行動や心情、前世の因縁を全て把握している様子が示されており、超常的な意味でも華陽公主よりも格上の

存在として設定されている。華陽公主よりも格上であるにもかかわらず、弁少将との恋愛を成就することができない鄧皇后の悲哀が、物語後半の主たるテーマであり、本作品は、弁少将という男に対する鄧皇后の恋情とその抑圧が主題として描かれているのである。ただし、あくまで弁少将の視点によって物語が進行するため、鄧皇后の心情描写は非常に断片的であり、あるいは弁少将の耳目を通してのみ表現されるのである。しかし、そのような限定的な情報を通してでもなお鄧皇后の痛々しい心情が伝わってくることを意図して、本作品は構成されているといえよう。

弁少将との逢瀬を重ねている時期には、鄧皇后は皇太后かつ国母という立場であり、華陽公主以上にその恋愛成就は困難なことである。そもそも不倫不敬きわまりない恋情であるのだが、弁少将と鄧皇后は共に天界の住人であったという前世の因縁によって、罪の意識は回避されており、社会的な面で両者の恋愛が制約を受けることはなかった。むしろ、鄧皇后が漏らしたように、天帝から役割を与えられて人間界に下ってきた身でありながら、弁少将と恋愛関係に陥ったことで天帝から罰を受けるであろうことが鄧皇后にとつての障碍であり、葛藤の源であった（前掲用例（P）波線部）。華陽公主の場合には、いったん昇天することによって障碍が回避されたのに対して、鄧皇后のこの障碍には解決策が用意されていない。天帝からの罰を覚悟の上で結ばれた弁少将との関

係でありながらも、その弁少将の帰国を積極的に推進する役割を鄧皇后が担っていることも、実に皮肉な物語展開である。鄧皇后の心情が具体的に描写されるのは、弁少将に全てを告白する場面ただ一度であり、それも鄧皇后本人が弁少将に対して心内を語るといふ形になっているため、その内容が真実の事情・心内を反映しているという保証はない。そのような決断に至る鄧皇后の心情は、物語の前面に現れてはいないといえ、実に深いテーマであり、読者の想像力を大いにかき立てるものであるといえよう。

そもそも鄧皇后は、華陽公主と弁少将との恋愛関係を見通しており、そのことに対して公主のような妬心を抱くことはない。逆に弁少将の帰国に際しても、日本に転生する公主のために公主の形見の品をこっそりと弁少将の許へ送るなどして二人の恋愛関係を支えるのである。このように鄧皇后は、弁少将の将来や宿命を慮って自らの恋心を抑制して身を引くばかりか、「鄧皇后の」御心一つにのたまひおきてければ、かうと細かに知る人もなし」（二三二―二三三頁）と、華陽公主と弁少将の恋愛関係も含めた全ての秘密を背負い、現世での残りの人生をただ一人で送る覚悟をしている。これは後の中世王朝物語に多く見られる「悲恋通世譚」における男主人公側の心理との類似性を指摘することができよう。

例えば、『しのびね物語』の中納言は、相思相愛であるしのびねの姫君が帝の寵愛を受けるようになった際に、姫君の

将来そして幸せを慮つて帝の寵を受け入れるように諭し、来世での一蓮托生を願つて自らは出家を決意している。『石清水物語』においても、主人公である伊予守は木幡の姫君との恋愛に悩むものの、相思相愛となり得たことによって心の充足を得、現世での恋愛の成就の代わりに、来世での一蓮托生を願つて出家を遂げる。この伊予守の出家は、自らとの関係によつて、果ては女御ともなるべき木幡の姫君の幸を奪つた上に、終生憂き名を負わせることを慚愧し、現世での女の幸せを願つたことがその根底にある。

本物語でも、鄧皇后は梅里の女として弁少将に恋愛の真相を告白し、日本での男の幸せを願つて別れを決意しており、これは右記の中世王朝物語に多く見られる「悲恋通世譚」の男主人公の姿と重ね合わせる事が可能である。しかし『しのびね物語』『石清水物語』などの男主人公たちが来世での女君との再会に希望を托しているのに対し、鄧皇后と弁少将の場合には、以下に述べるように二人が来世あるいは天界において再会を果たす可能性は高くはないと考えられる。

鄧皇后の素姓告白の場面において、鄧皇后と弁少将は共に天界出身であることが明らかとなった。そして鄧皇后が二人の別れに関して、「いづれ天界で再会できるであろうから、この世の別れは惜しまなくてもよい」と述べているが、その言葉を額面通りに受け取つてよいのであろうか。弁少将の来世については、「蓬萊の仙宮のうちに、世々に結べる契り（『

華陽公主との契り）深くて、この世（『人間界』）の命もまた久しかるべきゆゑあれば」、「琴の声にかかづらひて、下界にとまるべきゆゑあり」（二二六頁）と描かれており、「この人間の世で長生きするため、すぐには天界に戻りにくい」といわれている。天界というものが本物語においてどのように設定されているかが不明であるので想像の域を出ないが、仮に『往生要集』に記されている「地上での百年は天界の一晚にすぎない」ことを踏まえると、人間の寿命程度はさして時間的問題にはならず、悲嘆するほどの別れではない。それにもかかわらず、梅里の女の言では、「前の世後の世とも頼まれぬ別れの道は、ただ今こそは限りならぬ」（二〇五頁）という用例に見られるように、弁少将との関係は来世に継続できず、現世限りのものであると、その刹那的な関係を嘆き悲しんでいるのである。これは一般的には恋愛時における恨み文句の常套であるとも考えられるが、現に前世（天界）の記憶を有している鄧皇后の感慨であることを考慮すると、単なる修辭ではなく事実を反映していると考えられよう。さらに、鄧皇后が「心細く感じられるので何としてでも自らの死を看取つて欲しい」と切に願っていること（用例（S）傍線部）、しきりに現世での再会を願っていること（用例（丁）傍線部）を考え合わせると、天界においてたやすく再会できない未来を鄧皇后は予想しているのではないだろうか。それゆえに、自分の存在を弁少将の記憶にとどめ、もしかしたら再び渡唐してく

れるかもしれないという微かな期待の表れとして、形見の鏡を渡したのであるう。

(S) (鄧皇后)「……かりそめにも父母所生の身(＝人間の身)をうけつれば、いまはの閉ぢめ、さすがに見捨てんほどの心細きを、むげに心知る人もあるまじきに、そのほどばかり、ありがたき(弁の)身の暇なりとも、今ひとたびの情けはかけられんや。

(和歌六三) 行く方も曇らぬ月の影(＝鄧皇后) なれど入る山までは(弁少将が) 尋ねても見よ」

(T) (鄧皇后)「さてもはかなき世の命のほどを忘れて、この世ながら今ひとたびの対面の待たるこそ、『弁少将の両親が』待ちつけずは(弁少将が)とまる心もや」とあぢきなきまで」と、押しのこはせたまふ御気色のかたじけなきを… (一二三頁)

『今昔物語集』巻一——一八には、仏の異母弟難陀は死後に切利天に転生する予定であるものの、切利天の寿命が尽きた後には地獄へ堕ちる運命であることが記されており、このことから天界の人間が必ずしも再び天界に転生するとは限らないことが分かる。本物語でも、鄧皇后が人間界にて弁少将と結ばれたがゆえに天界に戻る資格を喪失する可能性や、弁少将が華陽公主と結ばれて人間界で過ごすうちに天界に戻る資格を喪失する可能性、あるいはその両方を読者に意識させ

る展開となっており、それゆえに弁少将との別れの場面は、来世での一蓮托生を期待できる後の中世王朝物語とは異なり、再会すら困難である鄧皇后の絶望に近い哀しみが現れた究極の「悲恋」物語が描かれていると考えることができる。

おわりに

本稿では『松浦宮物語』に登場する女君である神奈備皇女、華陽公主、鄧皇后の三者について、その物語展開および人物造型に関する分析を行い、主人公である弁少将との間の位置付けを含めて検討を行った。三人の女君は三者三様に造型されているが、大きな共通項としては、ごく初期の神奈備皇女との逢瀬を除いて恋愛過程における弁少将の積極性がほとんど見られない点を指摘できる。幾たびも掲げた三角氏による「主人公弁少将には恋の物思いがつきないということが主題である」との指摘のように、弁少将は全編を通して単に物思いをするだけであり、華陽公主や鄧皇后との恋愛成就のための積極的行動は全く見られない。弁少将が物思いをするのみというこの物語展開は、しかしながらそのことが三角氏の指摘のように物語全体の主題であることを意味しているわけではない。確かに、あくまで弁少将を主人公として捉え、彼の立場から解釈するならば、この物語に描かれていることは「物思いが尽きない」程度のことに過ぎず、それは本物語が作品として非常に物足りなく感じられる所以であろう。弁少将は

確かにこの物語の主人公であり、多くの事象が彼の視点を通して描写されているが、その一方で彼は決してこの物語の主体的存在ではなかったのである。

神奈備皇女の物語にて検証したように、彼女に対する弁少将の態度は主人公としての魅力に欠けるものであった。弁少将は作中にて優れた人物であることが幾度も強調され、琴の秘曲を会得したり、戦乱を平定するなど卓越した能力を示している反面、恋愛においては積極性を全く発揮せず、華陽公主や鄧皇后に対しては受け身の態度に終始している。このことも、例えば『源氏物語』の光源氏をはじめとする主人公と比べて魅力に欠ける点であると考えられる。それゆえか、これまで『松浦宮物語』が恋愛物語として高く評価されることはなかった。

『源氏物語』をはじめとする多くの物語において採用されている「社会的障壁」は、この物語では全く機能していない。そもそも神奈備皇女に関しては彼女の入内という障壁を乗り越えようとする意志を弁少将は持つておらず、華陽公主については皇帝の妹と異国人という身分差、鄧皇后に関しても現皇帝の母という立場が恋愛成就を阻害する社会的障壁として機能するはずが、それらが本物語において展開に大きな影響を与えることはなく、軽視されている。前述したように弁少将が恋愛に関する積極性を持たないということは、恋愛成就に対する障壁が重要な価値を持ち得ていないことの要因でも

あり、また結果でもある。主人公である弁少将は、華陽公主や鄧皇后といった「社会的障壁」を有する相手と秘かに恋愛関係に陥るものの、そのことが彼に物理的困難や精神的苦痛をもたらすことはない。これは特に鄧皇后との恋愛の場合に顕著であるように、唐土という舞台が登場人物たちにとってのは仮の世界に過ぎないからである。仙女の生まれ変わりである華陽公主は、いったん昇天し、弁少将帰国後に復活を遂げ、また任務を帯びて天界より下ったとされる鄧皇后は、超常的な力を用いて梅里の女として弁少将の前に現れる。主体性のない弁少将に代わって彼女たちは二人ながらに積極的に障壁を打破すべく決断し、行動している。それだけではない。障壁を打破する過程において女君たちはそれぞれに禁忌を犯すような行為を行っているのであり、とりわけ華陽公主と鄧皇后は、現世における恋愛を禁じられているにもかかわらず、弁少将への想いを叶えることを優先しており、そのことによって罰を蒙ったり本来の来世に至る運命をねじ曲げたりすることを厭わない。しかし、弁少将自身はそのことを明確に意識してはおらず、女君たちの覚悟や献身に気付いている形跡はない。ここに至って、三角氏が「作者定家は筋の進行にしたがってその都度場面を組み立てていく、そういう創作方法しか持ちあわせていないのであった」と評した所以も明らかとなろう。物語を弁少将の立場から解釈する限りにおいては、恋愛におけるあらゆる障壁が弁少将の自覚のないままに

解消されてしまっているものであり、あたかも都合良く舞台が整えられていつているかのように感じられてしまう。それはすなわち弁少将自身が物語を積極的に展開させる役割を担っているという事実に起因している。この作品において真に物語を展開させる役割を担っているのは、実は女君たちなのであり、筋の進行は彼女たちの決意と犠牲によってもたらされているというのが、正しい物語構造といえるべきであろう。主人公としての魅力に欠ける弁少将、弁少将の行動に頼らず自ら障碍を打破する女君という構図は、本物語が弁少将の視点から描かれたつもその実むしろ女君側を恋愛における主体として構築されていることを示唆するものであり、本物語の主題は女君側から捉えられるべきであること―それは主として悲恋に属するものであるが―を意味しているのである。

＊『松浦宮物語』の本文は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠り、表記は私に改めた。

その他の引用に関しては以下に拠り、表記は一部私に改めた。

『無名草子』：新潮日本古典集成（新潮社）

注

（1）萩谷朴「松浦宮物語は定家の実験小説か」（『国語と国文学』四六―八・一九六九年八月）後に『松浦宮全注釈』（若草書房・

一九九七年）の「解説」に所収

（2）永積安明・中田剛直「松浦宮物語」（『日本文学大辞典』新潮社・一九五一年）、市古貞次「中世物語の展開」（『中世小説とその周辺』東京大学出版会・一九八一年）

（3）大槻脩「松浦宮物語についての覚書」（『語文（大阪大学）』二七・一九六七年五月）

（4）石井由紀夫「松浦宮物語」における構想の破綻―宇文会と鄧皇后―（『鉏路論集』九・一九七七年十一月）、中野幸一「松浦宮物語」（『日本古典文学大辞典』岩波書店・一九八四年）

（5）松村雄二「松浦宮物語」（『解釈と鑑賞』四五―一・一九八〇年一月）、豊島秀範「藤原定家と松浦宮物語（七）―作品構造と作者の意図（五）―」（『季刊歌学』一二・一九八二年七月）

（6）三角洋一「松浦宮物語」の主題と構想（『高知大國文』五・一九七四年九月）、同「松浦宮物語」の意図をめぐって」（『高知大学学術研究報告（人文科学）』二四―一・一九七五年九月）後に『物語の変貌』（若草書房・一九九六年）に所収

（7）豊島氏（前掲注（5）論文）

（8）石田吉貞「松浦宮物語」の定家的意義（『学苑』三六一・一九七〇年一月）

（9）萩谷氏（前掲注（1）論文）

（10）佐々木理「松浦宮物語―民譚要素と中心テーマ―」（『文学』八一・一九四〇年九月）、百川敬二「後期物語の特質」（『解釈と鑑賞』五三―三・一九八八年三月）、広瀬昌子「浜松中納言・松浦宮物語の地名表現について」（『甲南国文』三九・一九九二年三月）、塩田公子「浜松中納言物語と松浦宮物語―『唐国らしさ』をめぐって―」（『物語の方法』世界思想社・一九九二年）

- (11) 益田勝実「平安時代から鎌倉時代へ―古典主義の動揺―」(『文学語学』二二・一九六一年十二月)では、天人と人間のギャップを心身の分裂として捉えて論じている。松村氏(前掲注(5)論文)、小川豊生「物語のアレゴリー」『松浦宮物語』の(語り)の方法をめぐる―(『年刊日本の文学』三・有精堂・一九九四年)、伊井春樹「松浦宮物語の方法」(『詞林』一五・一九九四年四月)
- (12) 佐々木氏(前掲注(10)論文)、中野氏(前掲注(4)解説)
- (13) 石田吉貞「松浦宮物語の作者は藤原定家か」(『国語と国文学』一七・六・一九四〇年六月)、久保田淳「松浦宮物語」の橘氏忠「『国文学』二〇―一五・一九七五年十一月、森晴彦「松浦宮物語」神威現象覚書―分身十人とその数の背景について―」(『解釈』三六―二・一九九〇年十二月)、萩谷朴「松浦宮全注釈」(若草書房・一九九七年)の「潼関」「御門・母后ひとつ御こし」などの「釈」部分、日下力「定家と戦乱」(『明月記研究』三・一九九八年十一月)
- (14) 萩谷朴「松浦宮物語作者とその漢学的素養(上)(下)」(『国語と国文学』一八・八・九・一九四一年八月・九月)後に『松浦宮全注釈』(若草書房・一九九七年)の「附録二」に所収、池田利夫「見ぬ唐土の夢―『松浦宮物語』を中心に―」(『更級日記浜松中納言物語攷』武蔵野書院・一九八九年)
- (15) 萩谷氏(前掲注(1)論文)
- (16) 萩谷朴「松浦宮全注釈」(若草書房・一九九七年)の「歌八」の釈の部分
- (17) 弁少将から神奈備皇女に詠みかけた贈答歌は三首ある。詳細を見てみると、弁少将の詠歌の詞(傍線部)に対して、神奈備皇

- 女の詠歌の詞(二重傍線部)が対応していることが分かる。
- 和歌(一) 大宮の庭の白菊秋を経て移ろふ心人(≡神奈備皇女知らんかも (弁少将詠歌)(二七頁)
- 和歌(二) 秋を経て移ろひぬともあだ人(≡弁少将)の袖かけめやも宮の白菊 (神奈備皇女の詠歌)(二八頁)
- 和歌(一)「大宮の庭の白菊」に対して、和歌(二)「宮の白菊」、和歌(五) いたづらに明かせる夜半の長き夜の暁露に濡れか行くべき (弁少将詠歌)(二〇頁)
- 和歌(六) 暁の露のその名し漏らさずは我忘れめやよろづよまに (神奈備皇女の詠歌)(二〇頁)
- 和歌(五)「暁露に」および「その名は言はじ」との詞(二〇頁)に対して、和歌(六)「暁の露のその名し漏らさずは」、用例(B)の和歌(七)「なげきをさへに添へてたくな」(弁少将の詠歌)に対して、用例(C)の和歌(八)「人のなげきはたき尽くすがに」(神奈備皇女の詠歌)
- (18) 山崎淳「『松浦宮物語』における神奈備皇女の位置付け」(『詞林』一五・一九九四年四月)
- (19) 思へども身をし分けねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる『古今和歌集』巻八・離別歌・三七三・伊香子淳行 目に見えぬ風に心をたぐへつやらば霞の別れこそせめ (『後撰和歌集』巻十九・離別羈旅・一三四三・伊勢)など。
- (20) 鈴木一雄「日記文学における和歌(その2)―女からの贈歌―」(『王朝女流日記論考』至文堂・一九九三年)
- (21) 小町谷照彦「和泉式部日記の贈答歌の達成」(『王朝文学の歌ことば表現』若草書房・一九九七年)

- (22) 丁莉「女の贈歌とその様相」(『伊勢物語とその周縁―ジェンダーの視点から』風間書房・二〇〇六年)
- (23) 松浦あゆみ「『松浦宮物語』の「血の涙」表現をめぐる作品構造考―渡唐の物語展開における「うつほ物語」取りの〈重なり〉―」(『平安文学研究 衣笠編 和泉書院・二〇〇九年』)
- (24) 三角氏(前掲注(6)) 論文
- (25) 拙稿「『石清水物語』にみる男君たちの女性観―秋の中納言と伊予守の根源的な差異―」(『詞林』四三・二〇〇八年四月)
- (26) 小林正明「伊勢物語を読む」内の「運命を嘆く」の項(『竹取物語伊勢物語必携』学燈社・一九八八年)
- (27) 三角氏(前掲注(6)) 論文
- (28) 住谷智「松浦宮物語」(『王朝物語必携』学燈社・一九八七年)
- (29) 松浦あゆみ「松浦宮物語」における「破綻」の方法―『浜松中納言物語』を前提とした再構成検証―(『日本文学』五二―一二・二〇〇三年十二月)
- (30) 石井氏(前掲注(4)) 論文
- (31) 錦仁「定家と物語―『松浦宮物語』試論―」(『論集藤原定家』笠間書院・一九八八年)、松村雄二「『松浦宮物語』の定家」(『国文学研究資料館紀要』一九・一九九三年三月)
- (32) 松浦氏(前掲注(29)) 論文
- (33) 萩野敦子「中古最末期物語における女と男の〈見る〉力―『在明の別』『松浦宮物語』をめぐる―」(『国語と国文学』八六―五・二〇〇九年五月)
- (34) 『往生要集』(岩波文庫)に「人間の一百歳を以て忉利天の一日夜となして」(一八頁)とある。
- (35) 島内景二「『松浦宮物語』を読む」(『源氏・後期物語語話型論』

新典社・一九九三年)では、弁少将は華陽公主とともに「音楽(琴)」に執着するというある種の罪を重ねることで地上(人間界)を徘徊すると解釈されている。

- (36) 三角氏(前掲注(6)) 論文
- (37) 三角氏(前掲注(6)) 論文

(いのもと・まゆみ 本学大学院博士後期課程修了)